春畔道

緋乃柄　みう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春畔道

【Ｎコード】
Ｎ３６７０Ｄ

【作者名】
緋乃柄　みう

【あらすじ】
春の畔道、”僕”は星の瞳の花を左手に持ち、神社を歩く。……
瑠璃と共に

（前書き）

続ける予定はなかったのですけど、前作『白景色』と掛けてあります。こちらだけでも読めます。

星の瞳が咲き乱れる畔道。
その花は優しい藍で、僕の足元に彩を添えている。彼方に見える桜の枝はうっすらと桃に色付き、満開にはまだ少しの時間を要するのだろう。
その場に屈み込み、その小さな花弁に手を伸ばす。何かに縋るように、答えを求めるように。
その花が、萼の部分から音もなく、ぽろりと落ちた。
何故だか僕はそこで急に居た堪れない気持ちになって、その花を左の掌に握り、また立ち上がる。暖かな春の日差しは、僕の全身を包み込んで大地に降り注ぐ。それは、もうすっかり春だということを図らずとも知らせてくれていた。
畔道を逸れて山の脇、木漏れ日の神秘的な神社の鳥居を潜る。ぽつぽつと樹の間から溢れる春は白い染みになって、石造りの参道に影を作っていた。
コツコツ、と境内に靴の音が響く。鎮守の杜にまで浸透していく音に身を任せながら、拝殿に向かう。本殿は見たことがない。
カツカツ――自分の足音ではない、もう一つの音が小さく木霊する。
後ろを振り向くと、いつの間にか僕の後ろに小さな女の子が付いて来ていた。僕が立ち止まると、びっくりしたようにいそいそと立ち止まった。
――何か用？
僕が話しかけると少女はゆっくりと顔を上げ、温かく穏やかで、見る者を幸せにさせるようなあどけなさで笑ってみせた。
少女の手を取って、隣に来るよう促す。二人で並んで歩いていると、木々が風に揺すられた時のような、静かな声がした。
――瑠璃

少女の名前なのだろう。
瑠璃はこちらを見て穏やかに笑ってくれた。それだけで、心に何かが溢れてくるのが解る。
暫くの静寂。山の声に耳を傾けながら歩く瑠璃との時間は、掛け替えのないものに感じられて心が静まっていくのが解る。いつまでもこの時間が続いて欲しい。
ゆっくりと歩いていると、僕の心の感傷が薄れていくような気がした。左手に感じられる温もりが、今は僕の全てに感じられる。
瑠璃が僕の手を一際強く握る。
見ると、瑠璃は笑ってくれた。あの温かく穏やかな笑みだが、どこかそこには、戸惑いが混じっていたような気がする。その中の寂しさが、いつまでも残像のように僕の眼に残る……。

……静寂は、本の些細なことで破られた。
参道で鳴いていた雀たちが、音を立ててパタパタと、澄み切った光の中に飛んで行ったのだ。
左手の隙間に優しい春風が通り、少しの時、気が付かなかった。
瑠璃は、もう僕の隣にはいなかった。拝殿の手前。もうこんな所まで来てしまっていたのか。
左手にあった星の瞳の花は、もう既にない。代わりに少女の手の温かみと、春風の優しさが手の中に残っていた。
何故だか、またすぐに会えると僕は思った。
鳥居を潜り、境内を出る。遥か遠方に見える山、うっすらと色付いた桜。
――あの桜が散る前にもう一度……
それでなくても、後一年すれば会える。僕には、そんな気がしてならなかった。

（後書き）

オオイヌノフグリ＝星の瞳＝瑠璃唐草＝天人唐草……です。一応ショートショート第二段です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3670d/

春畔道

2011年1月4日15時36分発行